

主 文

本件上告を棄却する。

当審における未決勾留日数中70日を第1審判決の懲役
刑に算入する。

理 由

弁護人滝谷滉の上告趣意は、単なる法令違反、事実誤認、量刑不当の主張であり、被告人本人の上告趣意は、単なる法令違反、事実誤認の主張であって、いずれも刑法405条の上告理由に当たらない。

なお、所論にかんがみ職権で判断する。原判決の認定によれば、警察官が、被告人に対する覚せい剤取締法違反被疑事件につき、搜索場所を被告人方居室等、差し押さえるべき物を覚せい剤等とする搜索差押許可状に基づき、被告人立会いの下に上記居室を搜索中、宅配便の配達員によって被告人あてに配達され、被告人が受領した荷物について、警察官において、これを開封したところ、中から覚せい剤が発見されたため、被告人を覚せい剤所持罪で現行犯逮捕し、逮捕の現場で上記覚せい剤を差し押さえたというのである。所論は、上記許可状の効力は令状呈示後に搬入された物品には及ばない旨主張するが、警察官は、このような荷物についても上記許可状に基づき搜索できるものと解するのが相当であるから、この点に関する原判断は結論において正当である。

よって、刑法414条、386条1項3号、181条1項ただし書、刑法21条により、裁判官全員一致の意見で、主文のとおり決定する。

(裁判長裁判官 横尾和子 裁判官 甲斐中辰夫 裁判官 泉 徳治 裁判官
才口千晴 裁判官 涌井紀夫)